第 3 号　別冊　平成 28(2016)年 9 月 30 日発行

平成 28 年度　学校法人皇學館・篠田学術振興基金助成研究

近現代日本における「皇室と福祉事業」に関する研究会　ニューズレター

韓国・釜山 東義大学校 研究交流 特集

別冊

日韓研究交流会メンバー（東義大学校 伽耶キャンパス）

日韓研究交流の契機と目的

櫻井 治男

平成 25～27 年度の 3 か年にわたり、篠田学術振興基金の助成を受けて本格的にスタートしたが、その最終年度となり新たな研究課題を含むこととなった。すなわち、災害支援と「恩賜金」下賜の関係について、戦前期における韓国の状況を視野に入れた研究を進めるという点である。研究協力者の冬月律氏が既に着手するところであったが、昨年 10 月 31 日に、九州大学で開催された韓日近代史学会で、釜山市の東義大学校・金仁鎬教授と出会ったことが大きなきっかけである。その後、本年 2 月に同教授を皇學館大学へ招聘し研究会を開催したことにより、相互の研究関心や共有すべき資料が徐々に明らかとなってきた。

今回の釜山訪問は、本年度からさらに 3 か年の計画で始めた当該研究の一環として、金教授と研究課題を深めるとともに、両国メンバーの交流、さらに韓国に残る資料の知見を得るためである。金教授は、資料のアーカイブ化や研究者ネットワークの構築を強く意識されており、また若手の研究者が周辺におられる。当方も比較的広い専門分野にわたる共同研究の特色を示すとともに、これからの研究推進を意識して訪韓メンバーは若手を中心に構成した。

短時間の交流であったが、確実な資料に基づき手堅く基礎研究を進めることを共通の了解事項として確認でき、所期の目的を果たせたのではないかと思う。

目次

第 3 号　別冊

日韓研究交流の契機と目的 ・・・・・・・櫻井治男 1

韓国釜山の訪問と調査 ・・・・・・・遠藤慶太 2

東義大学校「日帝強占期朝鮮恩賜政策資料集成」研究会とのセミナーを振り返って ・・・・・・・・・冬月律 2

釜山訪問記 ・・・・・・・・・・・・・・5

Busan で遊山・・・井上兼一 5

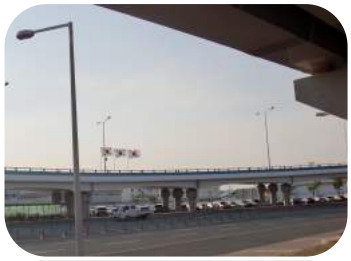
安国寺を訪ねて ・・・・・宮城洋一郎 6

金研究室の院生との交流 ・・・・・・・金田伊代 6

編集後記 ・・・・・・・・・・・・・・・・6

韓国釜山の訪問と調査

遠藤　慶太



平成 28 年 8 月 31 日(水)より 9 月 2 日(金)にかけ、研究資料調査・研究交流のため大韓民国釜山広域市を訪問した。訪問メンバーは櫻井治男・宮城洋一郎・冬月律・井上兼一・金田伊代・遠藤慶太の 6 名である。

8 月 31 日(水)

それぞれの出発地から韓国・金海国際空港で合流、東義大学校の研究メンバーに迎えていただいた。その後、歓迎の夕食会となった。

9 月 1 日(木)

東義大学校伽耶キャンパス(釜山鎮区伽倻洞山)を訪問し、日本・韓国双方の研究概要・メンバー紹介ののち意見交換を行なった。韓国側の出席者は金仁鎬先生(東義大学校教授)をはじめ、東義大学校の大学院生の方々、さらに高橋正憲先生(新羅大学校助教授)に通訳として加わっていただいた。

午後は釜山広域市立市民図書館(釜山鎮区草邑洞)を訪れ、館長の張元圭先生を表敬訪問の後、植民地時代の日本語文献の調査を行った。

同日夕刻には皇學館大学側主催の答礼の夕食会を開催、懇親を深めた。

9 月 2 日(金)

宿のロビーで今回の釜山訪問や今後の研究事業について打ち合わせを行い、実りある訪問をふりかえりながら、それぞれ雨の釜山から帰路についた。

釜山広域市立市民図書館前にて

金海国際空港にて 金研究室院生のお出迎え

東義大学校「日帝強占期朝鮮恩賜政策資料集成」研究会とのセミナーを振り返って

冬月 律

去る 9 月 1 日に本センターのプロジェクト研究「近現代日本における皇室と災害支援事業に関する基礎的研究」(代表：新田均教授、以下「本研究会」と称する)の一環として、大韓民国の東義大学校を訪問した。本研究会の釜山訪問期間は 2 泊 3 日であったが、ここでは 2 日目に行われたセミナーのうち、韓国側の研究概要の紹介を中心に報告していく。

報告に先立ち、改めて訪問先の東義大学校について簡単に紹介しよう。東義大学校は、大韓民国の釜山広域市に位置する 4 年制私立大学であり、釜山大学校、東亜大学校に次ぐ釜山 3 大大学として知られている。医学部を含む 10 学部に約 18,000 人の学生が在学している。工科大学(工学部)と商経大学(商経学部)は名門として知られているが、近年では医学研究が活発に行われている。また、同大学は附属病院として東義大学校附属韓方病院及び東義病院、東義医療院などを運営している。

さて、今回我々の研究チームが訪問したのは、東義大学校の人文大学史学科の教員である金仁鎬教授を中心とする「恩賜金研究」グループである。そもそも、今回のセミナー開催に至ったきっかけは、昨年 11 月の韓国日本近代学会と今年の 2 月に本研究会が開催した「公開ミニ・シンポジウム」両方に参加された金仁鎬教授との出会いであった。11 月の学会の同部会での発表で知り合い、少し立ち話をしていた際の、「私たちも恩賜金研究を進めていますので、今度共同研究とかできるといいですね」との話が、さっそく 2 月のシンポジウム開催という形で現実化した。シンポジウムでは金先生から「戦前期韓国における災害支援と朝鮮総督府・恩賜金について」をテーマに研究報告

(私の通訳を介して)がなされ、その後は研究会メンバーで質疑応答および意見交換が行われた。今回の韓国訪問についても、シンポジウムの時に、今度は韓国側の主催によるセミナー開催の話が出され、早々と現実化し、盛況に終わった。余談になるが、驚くことに、国内ならともかく、海外との共同研究会やセミナー開催に関するやりとりのほとんどが SNS 上で行われたことである。

経緯についてはこれくらいにしておき、次は今回我々を迎えてくれた金仁鎬教授の研究室メンバーの紹介をしよう。まず金仁鎬先生は、韓国近代史が専門で、主に日本植民地時代朝鮮における恩賜関連資料をもとに、全く知られていない 1910 年代の恩賜金の実態と 1920 年代に地方行政の補助手段に変化した恩賜事業、恩賜財団の運営実態に関する研究を行っている。次に、金先生の恩賜金研究プロジェクト(後述する)の実務責任者である鮮于性恵氏(Sun Woo・Sung He、女性)は、独立直前の釜山・慶南地域の企業動向に着眼した研究を進めている。李俊英氏(Lee・Jun Young、女性)は、韓国の近現代史を専門として、現在は朝鮮時代の日韓の関税問題に関する研究を行っている。金예슬氏(Kim・Ye Seul、女性)は、日韓併合期の釜山・慶南地域における会社設立およびその活動に関する研究を進めている。最後に、李用浩氏(Lee・Yong ho、男性)は、ベトナム戦争参戦軍人の位相と帰国箱および帰国物品に関する研究を行っている。とりわけ、李用浩氏に関しては、氏の経歴や研究テーマが異色を帯びており、個人的にも非常に興味深い内容であったことから、彼のことについて少し付言しておく。彼はベトナム戦争に 1969 年から 1970 年までの 1 年間参戦したが、40 代の闘病の原因が、兵役中に参加したベトナム戦争でアメリカ軍が使用した枯葉剤による被爆であったことが判明し、戦争障害者(枯葉剤判定)と認定された。半身不随にまでなっていた身体もリハビリを続け結果、徐々に快復に向かい、状況は好転した。新たな人生への一歩をと考えた時、頭に浮かんだのが、もともと好きだった勉強を再開することであった。その夢を叶えるために、まずは大学に進学した。その後も大学院で研究を続けることとなったが、大学院への進学を決めたきっかけが、大学卒業後の進路に悩んでいた際の金先生との出会いだったという。金先生は、彼のベトナム戦争の参戦経験はとても貴重で、さらに経験が研究テーマと結びついていることで従来の同分野でもユニークな研究になると高く評価していた。その内容を簡単にいえば、こうである。ベトナム戦争や参戦者から語られる内容は、主に枯葉剤による被害、アメリカに対する報恩、アジアの平和と自由守護、ベトナムの共産化撃退、韓国人の正義感や断固な決意などに集約されるが、李氏はそのような一般化されたことにはあまり興味を示さず、「帰国箱」(Homecoming Box、ベトナム戦争から祖国韓国に帰還する際に、軍人たちが支給品やラジオ、弾丸などの思い出の品や換金性の高い品を詰めた箱類の総称)が、朝鮮戦争後に疲弊した韓国の経済発展に大きく寄与したことに着目している。実際に彼から直接研究内容を聞くうちに、実にユニークで興味深く、セミナーに集まった参加者たちも話を聞きながら、なんども「へえ、なるほど」と頷いていた。ただ、事前に、セミナーでは通訳のことを考慮し、話は少しずつ進めるとの説明があったにもかかわらず、ご自身の研究について長々と語っていた彼には、一度も通訳する間を与えてもらえず、通訳であった私はひたすらメモをとることで精一杯だった。だが、ご自身の経験と研究内容を、日本人である我々に熱心に伝えようとした姿に、周囲の人は釘づけにされ、通訳である私ですら、彼の学問への熱意に魅了されてしまったのも事実である。

東義大学校　伽耶キャンパス

余談が長くなったが、もとの話に戻ろう。以上紹介したメンバーは、李氏を除いて現在同大学の大学院博士課程(いずれも指導教員は金先生)に所属しながら金先生の研究補助にも携わっているが、なかには他大学で非常勤講師をされている方もいた。

また、研究メンバーではないが、今回のセミナーのために、金先生のご配慮で私とともに通訳に尽力してくださったのが、高橋正憲氏(釜山・新羅大学校助教授)である。高橋先生は大学では日本語を教えながら、韓国語におけるメタファー研究をされている。高橋先生によれば、日本語のメタファー研究はそれなりに認知されているが、韓国ではほとんど研究がなされていないという。

最後に韓国における「日帝強占期朝鮮恩賜政策資料集成」(通称:恩賜金研究プロジェクト、以下「本研究」と称する)について金先生の研究報告から紹介しよう。本研究は、金先生を中心に 5 か年計画で行われている研究(BB21「最近 150 年間釜山地域製造業

体 DB 構築及び活用」)を基盤にして、今年 7 月に韓国研究財団の韓国学術振興財団(日本の文部科学省学術振興会に相当)に申請した研究事業名(課題)である。本研究の目的は「本研究は日帝強占期日本政府が朝鮮に投下した臨時恩賜金及び恩賜事業、恩賜財団に関する一帯の統計及び文書資料(現時点で約1万余件)を総合的に発掘し、整理することを目的」としており、メンバー構成については、金先生(韓国近代史)を代表に、行政教育学、文献情報学などの専門をもつ博士級研究員(分担者に相当)1 名と一般共同研究員 3 名の計 5 人構成となっている。次にそれぞれ研究者の担当については、主な研究計画と成果に限ってみていく。まず、責任者である金先生が全体の総括に務めながら「臨時恩賜金形成と配分に関する一般的論議の整理、地方別恩賜事業の実態研究、解放以後恩賜事業研究と資料集作成」を担当し、専任研究員は「時期別にみた恩賜金事業の研究、貴族および官僚に対する恩賜金および漢城銀行の運営に関する研究、恩賜金サイバー資料構築および活用方法の模索」、共同研究員は「教育方面に投下された臨時恩賜金の規模とその内容に関する研究、個人および社会救護恩賜事業の実態に関する研究、日本における恩賜金運営実態と事例研究、日本各地の恩賜金資料館の紹介資料およびデーターベースサービスのマニュアル開発」となっている。以上のような専門領域のもつ研究者構成とボリューム感満載の研究計画をみただけでも、本研究がどれほど大規模の研究であるのかが窺い知れるであろう。

最後に、金先生チームと我々の両方の恩賜金研究の観点から若干の感想を述べることにしたい。

セミナーでは、各自の自己紹介からはじまり、日本側の櫻井先生による本研究会のプロジェクトおよび恩賜金に関する研究概要の紹介に続き、韓国側の金先生による恩賜金研究プロジェクトの紹介がなされ、最後に双方の意見交換が行われた。なかでも意見交換の際に、櫻井先生の「私たちの研究としては、大きなプロジェクトとしての実現は力不足を感じるが、その代わりに古文書や資料の収集・解析・データベース化などの地道な作業に向いている研究者はたくさんいる」とする発言を受けた金先生からは、自分たちのプロジェクトでは、そのような地道な作業にはあまり積極的に取り組んでおらず、現在においては最大の課題となっていると述べていた。そのような意見交換を通じて、宮城先生の災害と恩賜金といった関係についてはまったく想定していなかったことや、遠藤先生の古代史、井上先生の教育史の観点を用いての恩賜金研究を含めた皇室の社会事業研究のアプローチは、それぞれの研究者が扱う分野こそは異なるものの、いずれも地道な作業を伴うことに共通点があることを再確認できたのである。余談になるが、実際に、午後は釜山市立図書館の配慮で、普段は立ち入ることの困難な重要文書保管室所蔵(韓国の近代資料や朝鮮総督府資料)の歴史資料を見ることができた時も、「ここでしか見られない」と思うあまり、史資料への渇望に駆られ、メンバーがそれぞれ片手にメモ帳とペン、片手にカメラを持ち、手あたり次第に資料が置かれている書庫を回ったり、棚を漁ったりしながら、目星の資料が見つかるとみんなが集まって歓声をあげていた。我々の図書館での滞在時間はわずか 2 時間ほどであったが、その間は日本を発つ前に抱いていた様々な不安などは忘れ、初めて訪れた重要文書保管室にもすっかり馴染んで、資料収集に夢中になっていた。その熱心な姿に、図書館の職員をはじめ、金先生や他のメンバーも驚いた様子であった。

最初は、組織的な恩賜金研究に圧倒され気味だった我々であったが、今回のセミナーを通じて得られた成果のうち、個別事例研究と同時に綿密な史資料の収集と発掘がいかに大事であるかを再確認する機会であったことは先に言った通りである。なかでも、最も大きい成果として二つ挙げてみよう。一つは、韓国と日本に限って言えば、植民地時代を扱う研究では避けて通れない政治との関係、反日感情による反発を恐れて植民地時代の資料を扱った研究を敬遠視しているなどの苦しい現状はあるが、それを「資(史)料は資(史)料。もはや感情や立場を盾にして守りに入る時代ではない。今求められるのは、まず資(史)料を客観的にみていくことの大切さを知り、実践すること」という考え(思い)を互いに共有できたことで、それらの問題について国際的(かつ学際的)立場を超えた研究への可能性が一段高まったことである。そして、二つ目、否、何といっても、近くて遠い国である韓国でありながら、このような分野における日韓の研究者同士の交流が盛んとは言えない状況に、我々研究メンバーが参加し、交流を持ったその事実、そして共同研究への道がまた開けたことこそ最大の成果にほかならないであろう。

今後は、それぞれの研究メンバーのさらなる研究に期待しつつも、共同研究会や調査なども企画し、友好関係を築いていきたい。すでに次回会う時が待ち遠しい。

釜山広域市立市民図書館での資料調査の様子

釜山訪問記

Busan で遊山

井上兼一

台風 10 号の進路に怯えながら 8 月 31 日を迎えました。幸いに欠航はなく、無事に金海国際空港に到着しました。空港から釜山市街地に向かう途中、高層マンションが乱立している景観(山の斜面にも！)に驚きました。釜山市は人口約 340 万人であるため、市街地や住宅地が過密である印象を受けました。

さて、ホテル到着後には、金仁鎬教授による歓迎の宴が待っていました。韓国風“すき焼き”に舌鼓を打ちながら再会を喜び、また院生と高橋正憲助教授(新羅大学校)と交流を深めました。

9 月 1 日は午前に東義大学校で研究会を行い、その後に隣の安国寺をお参りしました。韓国では五体投地拝礼が一般的とのことですが、不慣れなためうまくできませんでした。こうしたお寺には祈願成就のため、受験シーズンにもなると「百度参り」する保護者で溢れかえっているそうです。親が子を思う気持ちは、どこも同じなんですね。

場所を移して、釜山広域市立市民図書館に行きました。張元圭館長を表敬訪問し、そこから所蔵調査を行いました。史料の閲覧およびカメラ撮影ができたため、蒐集作業がはかどり、多くの収穫がありました。館長・職員の方々には、ご配慮いただいたことに感謝したいと思います。

図書館を辞した後には、金先生への答礼の宴を催しました。研究についてだけでなく、釜山の生活・文化など話題が尽きず、二次会・三次会と宴が続きました。釜山の夜は、伊勢とちがって眠らない街でした。

釜山広域市立市民図書館 張元圭館長を表敬訪問

安国寺本堂

ご住職直々にお茶の接待を受けました

9 月 2 日は、朝からあいにくの大雨。台風 12 号が九州地方を北上しているというニュースが入ってきました。飛行機の時間も迫っているため、ホテルで今後の打ち合わせをして空港に向かいました。慌ただしい日程でしたが、学ぶことが多く、有意義な調査になりました。

本研究会では、皇室と社会事業(恩賜金)についての研究を進めています。考えてみると、地勢的に日本と韓国は似ている関係にあります。台風が日本を北上して朝鮮半島に上陸すれば、韓国でも被害が生じます。釜山滞在中、「韓国では地震は、あまり発生しない」という話を聞きましたが、この原稿を書いている矢先(9 月 12 日)に、慶尚北道慶州市付近でマグニチュード 5.8(最大値)の地震が発生しました。韓国で観測が始まった 1978 年以降で最大規模の地震だったそうです。

台風による河川の氾濫や土砂崩れ、地震による建築物の倒壊そして津波など、何処でも起こりうる災害であることを再認識しました。そして、災害後の復興をどのように進めるか、支援するか、自然とどのように共生するか、ということは私たちの永遠の課題であることに気づかされました。先日の地震の被害が大きくなかったことを祈るばかりです。

安国寺を訪ねて

宮城洋一郎

今回の韓国・東義大学校訪問と研究交流の思わぬ副産物として、安国寺訪問があった。研究交流を終えてキャンパス散策の後に、同大学に隣接するように立地していたのが安国寺であった。残念ながらその由緒や伽藍にまつわるところを知ることができなかったが、ご住職様の歓待を受け、同行した金先生門下の院生の方から、仏教信仰の一端を教えていただいた。

安国寺は韓国最大の仏教教団・曹渓宗の寺院である。同宗の開祖は高麗時代の僧・知訥(1158～1210)で高麗民僧の第一人者と称されている。禅を基調とする宗派で、庶民の間に広がっていったところに特色があるようだ。

安国寺の大雄殿の中央には本尊・釈迦像があり、右壁画には阿弥陀如来の来迎が描かれていた。同行の院生の方は、本尊の前で五体投地の作法をみせてくださった。広く庶民の信仰を集めていることを伺わせるものであった。

日本にも赴いたことがあるというご住職様が、私たちの訪問をいたく感激され、特別のはからいで、お茶の接待を受けることができた。お茶の入れ方は中国伝統の方法によるものと思われるが、ひとつひとつの茶碗に丁寧にお湯を注がれる仕草が印象的で、ありがたいご縁を頂くことができた。

金研究室の院生との交流

金田伊代

今回の韓国訪問では、本研究会の 6 人のメンバーがそれぞれの住まいに近い羽田・名古屋・関西空港の三か所から金海国際空港へ現地集合することとなった。羽田からの飛行機の到着が遅れ心配する場面もあったが、無事に空港で合流し安堵した我々を出迎えてくれたのが、東義大学校の学生さんたちであった。

手作りのカードを持って車で空港まで迎えに来てくれ、3 日間我々に付ききりでいてくれたのは金先生の元で博士課程の学生として学んでいる鮮于性恵さん、李俊英さん、金예슬さんの三名(写真)。姉妹のように仲良しの三人であるが研究のことだけでなく、仕事のこと、将来のことと、プライベートのことなどお互いに相談し合い、支え合いながら研究生活をしているようであった。

我々メンバーは送迎だけでなく、東義大学校での研究会の準備や、懇親会会場の下見から接待、調査先の手続きなど、細やかに配慮いただいた。

筆者にとっては生まれて初めての韓国訪問であったが、学生さんたちを始め、出会う人皆に親切にしていただき、一気に韓国が好きになった。今年の 11 月には東義大学校の研究メンバーが来日の予定とのこと。今後も交流を深めていけるのを楽しみにしている。

編集後記

近現代日本における「皇室と福祉事業」に関する研究会ニューズレター第 3 号別冊「韓国・釜山東義大学校研究交流 特集」をお届けします。

今後の研究にも有益であることから、訪韓特集として別冊を作成しました。両国の研究交流の様子が生き生きと伝わるような内容になりました。（金田）

近現代日本における「皇室と福祉事業」に関する研究会
ニューズレター
第 3 号（別冊）

平成 28 年 9 月 30 日発行
発行　皇學館大学
現代日本社会学部
新田 均研究室©
〒516-8555
三重県伊勢市神田久志本町 1704
0596-22-0201(代)